

平戸藩における山鹿流兵学の受容過程

—問題提起と研究方法—

パリ第七大学・一橋大学 院生 Florent Debouverie

十七世紀になってからの二五〇年間、日本は大規模な戦争を経験しなかった。多くの武士が、戦いのない生活の中で、武士たる新たなアイデンティティを掴むべく、武士固有の学問を追求した。八世紀に中国から伝来し、後に日本で独自の発展を遂げた兵学は、その好例である。近世以前の兵学は合戦において重視されていたが、普及は限られており、流派も少なかった。江戸時代になると、六〇以上もの流派が創設されたほどの目覚ましい発展を遂げた。その中には五つの主な流派があり、山鹿流兵学はその一つであった。

山鹿流兵学の創設者である山鹿素行は、近世の武士道思想の創始者の一人だとされている。素行が武士思想に多大な影響を与えたことは、既に先行研究において指摘されているが、彼と山鹿流が武士社会に与えた影響や、兵学が武士社会においていかに捉えられていたかに関する研究は乏しく、未知の領域と言える。

その詳細を明らかにするべく、報告者は平戸藩における山鹿流兵学の受容・普及・影響について調べている。山鹿流はいかなる過程で平戸藩に受け入れられ、藩内に普及していったのだろうか。本報告では、それらの疑問に答えるために行っている研究の現段階までに得られた成果を紹介したい。